Hirosaki University Hospital Bulletin　2006年（平成18年）6月26日

発行：弘大病院広報委員会
（委員長：水沼英樹病院長補佐）

〒036-8563　弘前市本町53
TEL：0172-33-5111（代表）FAX：0172-39-5189
http：//www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

弘前大学医学部附属病院広報誌

南塘（なんとう）だより

第42号
（創刊：1994年12月15日）

※南塘とは，弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

附属病院長就任のご挨拶

弘前大学医学部
附属病院長　花田　勝美

本年４月１日付けで，弘前大学遠藤正彦学長より医学部附属病院長を拝命致しました。中期目標に掲げられた専任制のスタートです。所属も医学部から附属病院となりました。ネームプレートを替えた時点でようやく，病院職員として意識を強く感じるようになりました。引き続きよろしく御協力のほどをお願い致します。

「待ったなし」の時代を迎えております。今後は附属病院の存続をかけ，残された諸問題の解決にあたって「不退転」の決意で臨む所存です。これからも，魅力ある附属病院を目指し，病院運営の基本姿勢は，「医療の安全」，「医療の質」，「健全な経営」におきたいと存じます。前院長棟方昭博教授からは有能なスタッフが与えられました。副院長（保嶋教授），病院長補佐（福田教授，水沼教授，藤　教授，砂田看護部長）の皆様はいずれもベテラン揃いばかりです。各リーダーの先生には，早急に行っていただくべき事項をお願いしてございます。病院を挙げて円滑な運営にご協力いただき，62年の歴史を有する附属病院にぜひ目に見える形で足跡を残していただきたいと念じております。そのための支援は惜しみません。附属病院からの意見は，学長特別補佐として弘前大学役員会で発言する機会を与えられました。そんな中，平成18年度科学研究費の獲得件数は附属病院がトップクラスであることが伝えられました。研究の分野でも努力いただいている証です。

平成19年9月には私たちの希望の源である新外来棟が竣工し，平成20年１月には開業にこぎ着ける見込みです。病院待合室後方には完成模型を展示いたしました。新棟には一新された外来機能とともに外部から有名コーヒーショップの参入，患者様やご家族の「癒しの部屋（仮称）」，また別棟には育児施設の新設などが計画されており，診療活動の環境を整えるつもりです。しかしながら，地域あっての附属病院，患者様には質，量ともに豊富な情報を提供し信頼に応えてゆかねばなりません。スタッフの皆様のご支援とご助言を切にお願いし挨拶に代えさせていただきます。

火中の栗

なお，就任にあたり，某先生からは「火中の栗」（写真）なるものをいただきました。食べるべきか，しばし止めるべきか，目下，思案中です。

平成18年度新体制スタート！【役職員紹介】

平成18年４月から病院長職が専任制となり，皮膚科学講座　花田勝美教授が就任しました。病院の管理運営及び経営に強いリーダーシップを発揮できる体制が整備され，新体制がスタートしました。

副病院長
保　嶋　　実
（臨床検査医学講座　教授）

病院長補佐
福　田　幾　夫
（外科学第一講座　教授）

病院長補佐
藤　　哲
（整形外科学講座　教授）

病院長補佐
水　沼　英　樹
（産科婦人科学講座　教授）

病院長補佐
砂　田　弘　子
（看護部長）

診療科の紹介【歯科口腔外科】

昭和42年弘前大学医学部附属病院歯科診療科として発足し，44年より歯科口腔外科としての標榜がなされ現在に至っています。歯科口腔外科の診療は，歯科的疾患はもとより顎口腔領域に生じるすべての疾患を対象としています。具体的には，う蝕，歯周疾患や，それに伴う顎骨周囲の炎症性疾患，口腔に生じる良性・悪性腫瘍，上下顎骨骨折，頬骨骨折などの外傷性疾患，顎骨の嚢胞性疾患，顎関節症，骨格性の下顎前突症などの顎変形症が比較的頻度の高い疾患です。

嚢胞性疾患に関しては，当診療科のメインテーマとして発足当時より臨床研究が行われ，外科的侵襲を極力さけるために嚢胞腔灌流療法を独自に開発し，良好な成績をおさめています。口腔悪性腫瘍も関連各科と協力しながら，根治性を高めながらも術後の機能障害を最小限になるよう治療を行っていますが，特に外科的治療では，切除から再建，術後の補綴治療までを一貫して行っています。顎変形症では県内の歯科矯正医と病診連携を密にして治療がスムーズに行われています。附属病院で行われている高度先進医療として，歯周組織再生誘導法とインプラント義歯が認定されております。インプラント義歯は，口腔腫瘍などにより顎骨や口腔粘膜が変形または欠損し，通常の義歯の装着が困難な症例に応用され，良好な咀嚼機能の回復に寄与しています。

現在，木村博人教授をはじめとして

11名のスタッフと3名の研修医が，病棟・外来に分かれて診療・教育・研究に携わっております。診療以外では，春の花見，夏の教室旅行以外にも，季節折々の行事を通じて病棟・外来のパラメディカルとともに和やかな雰囲気で親睦を深めています。

外来診療棟の建設状況

病院再開発事業は，昭和61年度から第一病棟，第二病棟，エネルギーセンター，中央診療棟の新・改築整備を順次実施，その最終整備事業として，平成16年度から外来診療棟新築工事を実施しております。

外来診療棟は基本計画を基に建物平面，電気・機械設備関係等を病院関係者と種々打合せを行い，諸法規等の規定に沿って設計図書が出来上がりました。

外来診療棟整備は，平成16～19年度にかけて予定されており，平成16年度に「軸Ⅰ工事」，平成17年度に「軸Ⅱ工事」の発注業務を行い，平成18年度は「仕上げ工事」の発注予定，建物全体の工事期間は平成17年１月に着工，平成19年９月に完成予定となっています。

外来診療棟は平成18年５月現在，鉄骨工事の最終となる部材の取付が行われ，５月23日には請負者において上棟式も行われました。これで，分かり易くたとえれば“骨”となる骨格部が完成したことになります。その他，建物の下層階からコンクリートを打設・建物内外の壁取設・窓や扉の取付・内装工事等の施工は“肉”となり，電気・通信・防災設備工事等の施工は“神経”となり，給水・排水設備工事等の施工は“血液”となる工程に順次進み，これらの工事が完了すれば建物が完成することになります。

外来診療棟の開院後は，既存建物を含めて地域医療に一層貢献できる東北有数の病院施設として活躍することになります。（施設環境部）

「鉄骨に据え付けたくす玉を割り，工事の安全を祈願した上棟式の様子」

〈著書紹介〉

「ER流研修指導医㊙心得47」

総合診療部教授
加　藤　博　之　著

弘大生協にて取り扱い中

本院加藤博之教授が表記のユニークな著書を刊行された。最前線の救急医，若き初期研修医，救急を垣間見たい熟練医師にとっても，肩の凝らない198ページの書である。指導医の格言と研修医K君（若き日の加藤教授？）の反省日誌がおもしろく，知識をいやが上にも確実なものにしてくれる。本書の評判が弘前大学医学部附属病院の研修医増加に繋がることを期待している。（羊土社、2006年，3,800円）。

（附属病院長　花田　勝美）

先憂後楽

ボランティア

医学部附属病院
副病院長　保嶋　実

医療を取り巻く環境はかつてない大きな変革の波に翻弄されている。構造改革や財政再建，小さな政府，規制緩和などのキーワードを振りかざして政策を進める現政権の任期切れを間近に控え，従来型社会システムから国際標準への転換いわゆるグロバリゼーションという目指す姿が，ようやく朧気ながら見えてきた。国際間の競争力を高めることを主眼としたもので，短期的には批判はあるものの，その流れの方向は継続するという見方が妥当であろう。

従来聖域とされていた医療政策においても，官から民へを合言葉に，当然のことながら米国をモデルとした費用対効果を最優先とする市場原理を導入した経済至上主義への一層の転換が図られている。このことは同時に格差社会の助長などと，その陰の部分を指摘する論調が目に付くようになっていることからも明らかである。公的医療保険の守備範囲の縮小など公的医療資源の減少は，結果として自己負担の増加にのみ繋がっていると受け止めているのが，現時点では大方であろう。還暦を迎える身にとっても，老後に向けて多少の不安を覚えるというのが正直なところである。

ここで注目しなければならないことは，範とする米国における医療資源の状況であろう。もちろん米国の医療制度の問題点について重々承知しているが，医療資源として，公的資源そして自己負担を補完するいわゆるボランティアの存在が重要な位置を占めていることを特筆しなければならない。米国社会はボランティアなくしては機能し得ないといわれる由縁である。詳細な試算の根拠は忘れたが伺った話によると米国のボランティアによる資源は年間30兆円程度の規模で，我国の５千億円に比べて約60倍とのことであり，ここに決定的な差がある。地域社会への無償貢献を当然とするボランティアの意識は，移民による建国という歴史にまで遡らなければ理解できないであろう。また，強い宗教観に裏打ちされた高い倫理意識に立脚する行動規範にも思い至さなければならない。

目の前の些事にかまけ，ボランティアとは縁遠い所で，満足な宗教教育を施されることなく齢を重ねてきた。高齢化社会を加速させる団塊世代の一人として，多少不純な動機であるが自らの老後をも見据えてボランティアへの関わりについて思いを巡らせるようになった。同時に今後の医療や福祉資源の在り方を論議する中で，避けて通れない社会的課題でもあるように考えている。

新しい中央診療施設等の紹介

地域連携室開設

平成18年４月１日よりこれまでの「継続看護室」が「地域連携室」と名称を変え，地域連携室長のもと，看護師長，医療ソーシャルワーカー（MSW）が配置されました。

皆様もご承知のとおり，今回の診療報酬の改定では全体でマイナス3.16％と病院経営上大幅な収入の減少が見込まれます。今後，病院全体として患者サービスの充実・向上，逆紹介を促進させ平均在院日数の適正化を図っていくことなどが必要となります。

地域連携室では患者様がスムーズに，また安心して本院や他の医療機関で受診することができるよう，病院全体として他の医療機関との連携強化を図ることや，これまで継続看護室において行ってきた後方支援を含め，保健・医療・福祉の包括ケアシステムにおける医療担当部門の一つとして退院調整を行っていくことなどを主な目的としております。

そのためにはまず，これまで以上に院内連携の充実をはかり，そのうえで，他の医療機関や保健・福祉機関等と連携をすすめていくことが重要となります。

今後，地域連携をすすめていくことで，患者様やご家族の方々が外来通院中・入院中・退院後・転院後も安心して療養できるように，皆様のご協力・ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

（地域連携室長　藤　哲）

歯科医師卒後臨床研修室開設

平成18年４月１日より「歯科医師臨床研修制度」が始まりました。本院では，歯科医師の臨床研修指導を効率的に運用する観点から，卒後臨床研修センターに併設する形で，「歯科医師卒後臨床研修室」を開設して頂きました。昨年度のマッチングの結果、募集定員５名に対し３名の歯科研修医が４月より研修を開始しております。

大学病院には，教育機関ならびに地域基幹病院として地域医療のリーダー育成という大きな社会的責務があります。高齢化社会が進む中，多様化する全身疾患に対応できる歯科医師を養成することが，本院における歯科卒後臨床研修目標の一つですが，花田病院長，加藤臨床研修センター長の御理解を得て，プライマリーケアセミナー受講を始めとする全身管理研修に歯科研修医も参加させて頂いております。また，大学病院は他職種とのチーム医療システムや院内感染予防，医療事故の防止なども幅広い研修機会に恵まれております。

医科に比べ，歯科では大学病院の他に，多様な臨床研修を実践できる研修施設が少ないため，地方国立大学病院は，歯科医師卒後研修の場として大いに注目されている所です。研修終了後は，優秀かつ熱意のある研修医のために，後期臨床研修として，臨床技能アドバンスコース，口腔外科専門医養成コース，大学院進学研究者養成コースなどを想定しています。

（歯科医師卒後臨床研修室長　木村博人）

医療支援センター開設

『医療支援センター』は検査部，輸血部，病理部の総勢36名（非常勤職員９名，パート職員１名含）の臨床検査技師で構成され，センター長（病院長補佐）が統括します。本センターは３部門の臨床検査業務を効率的に運営することを目的に開設されました。その基盤は，平成14年３月の「国立大学附属病院の医療情報提供機能強化を目指したマネジメント改革（病院長会議常置委員会）の提言」にあります。提言の中では，医療技術職員を一元管理するという従来の常識を超えた「診療支援部」構想が提案されたのです。この提案に鑑み，本院の実情に即した効率的配置を目途に検討したのが『医療支援センター』構想でした。早期実現のため，中期目標に掲げ今回開設の運びとなった訳です。

これを機に，６月からは臨床検査技師による「輸血検査業務の24時間体制」を開始しました。現在，提言にもとづき医療技術職員を一元管理する「診療支援部」開設大学は，18年４月１日現在で13大学です。本来の診療支援部の大きな目標は職種，部門を超えた業務の拡充であり，採血業務は看護師と，超音波検査は看護師及び診療放射線技師と，眼底写真検査は視能訓練士及び診療放射線技師と，聴力検査は聴力検査士と，さらにＭＲＩやＲＩ検査は診療放射線技師とコラボレーションができるのがメリットです。今回の，臨床検査技師を一元管理した『医療支援センター』が本院の業務の向上に貢献できることを願っておりますので，院内の皆様の御協力と御支援を御願いいたします。

（医療支援センター長　　水沼　英樹
文責　臨床検査技師長　葛西　　猛）

栄養管理部開設

歴史を辿ると国立大学医学部附属病院の栄養部門の組織は，戦後の混乱期に食糧の入手を円滑にする観点から給食係として事務部門の中に整備されたことに端を発する。その後の業務の拡大に伴い栄養管理室に名称変更されて現在に至っている（弘前大学医学部附属病院は平成５年に名称変更）。近年，劇的に変化する医療状況の中，栄養管理部門の業務内容も「物」から「人」へ，「集団」から「個々」へと質，量ともに著しい変貌を遂げ，現在では患者様個々の栄養管理を行う専門職種として，管理栄養士はベットサイドでの食事指導も求められるようになった。管理栄養士の職責と使命を果たすためには，医療チームの一員として他の医療技術職員と同列に位置づけられ，医療の一環として栄養・食事管理業務が円滑に行われる組織の整備が必須であることから，従来より「栄養管理室」から「栄養管理部」への更なる転換が求められていた。そのような背景の中，昨年11月に実施された厚生労働省による特定共同指導において，「食事は治療の一環であることを認識し，栄養管理部門の体制について改められたい」との直々の指導をうけ，平成18年４月より弘前大学栄養管理室は栄養管理部に発展的に名称変更がなされ，附属病院内の医療チームの一員として組織的にも明確に位置づけられことになった。

今後一層の業務の向上そして拡大を図り，名実ともに栄養管理部の充実を目指すとともに，診療の現場との連携を密にして，附属病院の診療のレベルアップに貢献できることを願っている。院内の皆様の御支援と御協力をお願いする次第である。

（栄養管理部長　　保嶋　実
文責　管理栄養士長　平野　聖治）

「地域医療支援センター主催講演会」

文部科学省が公募した平成17年度「地域医療等社会的ニーズに対応した医療人教育支援プログラム」（いわゆる医療人GP）に対して本学から応募した「青森へき地医療クリニカル・フェローシップー地域医療支援センターによる一貫サービスを基盤とした新教育プログラムー」と題するプログラムが採択されたのに伴って，平成17年11月9日付けで地域医療支援センターを開設されたことは前号でお伝えした通りです。このほど同センターの事業の一環として，へき地医療従事者に対する教育についての理解を深めるため，県内外で実際にへき地医療の診療と教育に従事している指導医を招き，3回の講演会がメ医学部コミュニケーションセンターで開催されました。講演会のテーマは，第1回「現場から見た本県へき地医療の問題点と改善策」（講師：青森県六ヶ所村尾駁診療所長　松岡史彦　先生，平成18年2月3日），第2回「地域医療現場におけるEBMの実践と教育：地域の現場だからこそできたこと」（講師：地域医療振興協会　地域医療研修センター長　名郷直樹　先生，2月28日），第3回「行動科学ー患者，地域，〇〇が変わるー」（講師：地域医療振興協会地域医療研修センター副センター長　八森　淳　先生，3月30日）です。これらはいずれも医学部の「地域医療教育ＦＤ」として認定され，多数の教職員・学生の参加を頂きました。皆様のご協力に感謝するとともに，今後も地域医療支援センターに対し一層のご支援をお願い致します。

（地域医療支援センター長　加藤　博之）

第3回　講演会で参加者に語りかける
八森　淳講師

看護の日によせて

今年も看護週間がやってきました。この恒例となった行事の準備は毎年２月，入院患者様へお届けするメッセージカードのデザイン募集から始まります。今年は，メッセージカードは，看護職員のユニホームのテーマカラー「桜とりんご」をモチーフに看護部職員のキャリアアップを象徴する「実りの木」にハート型のりんごと桜を実らせたメルヘンタッチのカードが仕上がりました。

ナイチンゲールの誕生日５月12日に，それぞれ担当ナースが回復への祈りをこめたメッセージを添え，入院患者様へお届け致しました。感激し涙する患者様や，ご家族からお礼の言葉を頂いたり，枕元に飾られたメッセージカードを目の当たりにして，多くのナースが看護への思いを新たにする機会にもなっています。また，玄関ホールには，弘前公園の櫻を引き継ぐかたちで啓翁櫻が咲き，多くの方々が，足を止め鑑賞して下さいました。

そして，今年は，患者様からこのような素敵な句が寄せられました。

「たたえなん　気品に満ちし姿こそ
奉仕の精神　汝は桜花　智世子」

今年も多くの患者様・ご家族から私達は勇気をいただきました。（看護部）

新ユニホームは“櫻と林檎染め色”

約一年をかけ，ユニホーム更新ＰＤＣサイクルを回し，ついに長年の夢であったユニホームが新しくなりました。

昭和50年代より着用してきたユニホームとの別れ，限りなくふくらむ夢と予算額との狭間で，デザイン選びが第一の関門でした。看護の効率性に貢献し，患者さまに清潔感・安心感を与えることができ，病院のイメージアップを図り，看護部職員自身のモチベーションを高めることができるような，そして，就職説明会にも話題提供できる等々，洗練されたデザインという欲張りな程の期待される効果を掲げ，全職員による猛暑の中での試着ショーから始まりました。機能性，材質等を重視したワンピーススタイル及びパンタロンタイプを採用し，看護助手用には，シンプルな中にもソフトな印象を与える色と材質，デザインを選びました。

第二の関門は，重要課題でもあった看護部をアピールする“弘大仕様”をどうするかでした。誰からともなく『弘前と言えば“櫻と林檎”だよね！』という声があがり，パンタロンタイプには櫻色，ワンピースには林檎染め色のパイピングをあしらい，ボタンの縫い糸も同色にし，さりげないおしゃれをしてみました。

３月中旬の配布，裾上げなど各自が準備を終え，無事2006年４月１日を迎えることができました。これからも，看護部の理念である，優しさと思いやりのある看護を提供していく所存です。

最後になりましたが，ユニホーム更新にご尽力下さいました棟方前病院長はじめ関係部署の皆様に感謝申し上げます。（看護部）

院内コンサート　3月16日 医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル　4月27日『春をうたう』熊木　晟二

患者サービスの一環として実施している院内コンサートが，３月16日及び平成18年度の第１回目として４月26日に，いずれも午後６時45分から外来待合ホールで開催され，両日とも約130名ほどの患者様たちが集まりました。

３月16日は，院内コンサートの常連である，医師及び医学部学生等からなる「医学部管弦楽団&医学部創立50周年記念アンサンブル」により行われ，プログラムは，モーツアルトの喜遊曲，バロック風日本の四季より「春」，フルート協奏曲など。演奏にはチェンバロも加わり，楽しいコンサートになりました。

また，４月27日には，前年から引き続き，熊木晟二先生を迎え，『春をうたう』と題して開かれました。

今回は，熊木先生ご夫妻のほか，娘さんの猿賀智美さんも参加し，親子での競演となりました。プログラムは，『春のうた』“早春賦・荒城の月・花”，『イタリアのうた』など。『デュエット』曲の“エーデルワイス”“すべての山に登れ”では親子で，バスが熊木先生，アルトが猿賀先生，ピアノ伴奏を奥様の美紀子さんが努められました。また，『みんなでうたいましょう』では“この野原いっぱい”を猿賀先生が患者さんの席に入ってみんなと一緒に歌うなど，終始和やかな雰囲気で和気あいあいのコンサートになりました。

両コンサートともに大変盛り上がり，会場の大勢の患者様たちには充分満足の様子で大好評でした。（医事課）

【編集後記】

例年にない大雪も４月には無くなり，あっという間に弘前城の桜が満開となりました。普段はあまり人通りの少なかった土手町や弘前城も新宿の駅のような人だかりでした。お化け屋敷やオートバイショーなどたくさんの出店に昔懐かしい思いをされた方も多いと思います。ふと気づくと，岩木山や八甲田山の山並みが遠くに美しく浮き上がり，すばらしい自然の景観を見せてくれています。ここ弘前は圧倒的な自然の中にある美しい町です。赴任間もない私にとってこれからどのような人や自然に出会えるのか楽しみです。

さて，弘前大学附属病院では４月から花田先生が病院長にご就任され，新任早々ご活躍です。定員５％削減など附属病院を取り囲む情勢は決して生やさしいものではありませんが，花田病院長のもとで全国でも一番の大学附属病院となることを期待しております。

本号ではまず，花田病院長に抱負をお書きいただきました。さらに，保嶋副病院長に原稿をお願いし，また，新たな役職員のみなさまをご紹介いたしました。４月からの新体制のスタートを祝う，内容の濃いものとなりました。皆様のご協力に感謝いたします。

（広報委員　東海林幹夫）